巻頭言

シミュレーション訓練

消防庁特殊災害室長
小　林　恭　一

先日、たまたまラジオで、アメリカにある架空の町の話をしていた。その町は「米軍が治安維持に当たっている外国の町」という想定で作られており、住民の役割はすべて民間請負会社の職員が演じている。米軍の兵士達は、この架空の町で何日も暮らしながら、治安維持やゲリラ対策の訓練を受けるのだそうである。

その訓練内容は実にリアルで、住民を信頼しながら締めるべきところはきちんと締めるなど、住民に信頼される良き米軍兵士としての態度がたたき込まれる。住民に厳しく接し過ぎればゲリラの報復を受け、少し気を許せばつけ込まれてテロにつながるなど、請負会社の職員達の演技は迫真的で、訓練を受ける兵士達のストレスは大変なものだという。

ひるがえって、我が日本の自衛防災組織や自衛消防隊の訓練はどうだろうか。訓練を受ける側からも訓練を行う側からも、「実際の災害状況とかけ離れている」、「シナリオどおりで緊迫感がない」、「臨機応変の対応力を養う訓練になっていない」・・・・・等々、随分昔から反省や不満の声が聞かれるが、なかなか改善されていないように見える。

もちろん、「その程度の訓練で出来ないことが実際の場で出来るわけはない」ということは真理であるし、機器操作等の反復訓練が不可欠であり、それだけでも一定の効果があることは、実際に火災等の災害に遭遇した隊員等にアンケートを取ってみると良くわかる。

しかし、火災等の事故防止対策が進み、事故等の発生率が減少してきているだけに、実際に小さな事故等に何度か遭遇することによってその対応方法を学ぶという、一種の体験主義ではもはや通用しないことは明らかである。また、建物や施設が巨大になり、それを動かすシステムも複雑になってきているので、防災センターやオペレーションルームにおいて、状況に応じて適切に判断する訓練等の必要性もますます増大してきている。

このような状況に応える方法論の一つが、環境や状況変化をなるべくリアルに設定して行ういわゆる「シミュレーション訓練」である。消防や防災の分野でも、これまで、パソコンを使った避難誘導シミュレーションゲーム、超高層ビル等の防災センター要員訓練システムなど、様々な試みがなされてきた。

石油コンビナートの分野では、シミュレーション訓練の考え方を取り入れた「防災体制検証マニュアル」の検討が最終段階に入っており、「実大規模のタンク火災消火訓練施設」の設置構想などとともに、発災時に適切な判断と対応行動が取れるような防災体制造りの推進とその評価のシステムの整備が進められている。このような考え方により、石油コンビナートの自衛防災組織についても、より効果的で合理的な体制の整備が飛躍的に進むものと期待している。